近代文学史2

大正の文学

紅野敏郎
三好行雄
竹盛天雄
平岡敏夫
編

有斐閣選書

正の文学

＊近代文学史 2＊

敏郎・三好行雄
天雄・平岡敏夫 編

有斐閣選書

編者紹介

紅野敏郎（こうの としろう） 早稲田大学教育学部教授
三好行雄（みよし ゆきお） 東京大学文学部教授
竹盛天雄（たけもり てんゆう） 早稲田大学文学部教授
平岡敏夫（ひらおか としお） 筑波大学文芸・言語学系教授

大正の文学〈近代文学史2〉 〈有斐閣選書〉

昭和47年9月15日 初版第1刷発行
昭和56年2月10日 初版第6刷発行

定価 1,300円

編者 紅野敏郎 三好行雄 竹盛天雄 平岡敏夫
発行者 江草忠允（えぐさ ただ あつ）
発行所 株式会社 有斐閣

東京都千代田区神田神保町2—17
電話 東京（264）1311（大代表）
郵便番号〔101〕 振替口座東京6-370番
本郷支店〔113〕 文京区東京大学正門前
京都支店〔606〕 左京区田中門前町44

印刷 大日本法令印刷・製本 稲村製本所
©1972, 紅野敏郎・三好行雄・竹盛天雄・平岡敏夫.
Printed in Japan
落丁・乱丁本はお取替えいたします。

1391-080304-8611

はしがき

明治維新以来、百余年間に生み出された文学作品は、数知れず、その中で、時代を超えてなお輝きつづけ、国民の精神の糧として読みつがれている作品も、また、数多い。さらに、時代の変転とともに一時的には埋もれていても、新しい照明のもとで生命を蘇らせた作品も少なくない。これらの近代文学の伝統と蓄積の上に、現代の我々の文学も存在している。文学の享受とは、作品・作家と自己との語り合いにほかならぬ以上、まず、文学作品に親しむことが先決であるが、そのためにも、近代文学の歩みを歴史的・体系的に把握し、理解しておくことは、必要不可欠なことである。この『明治の文学』『大正の文学』『昭和の文学』の三冊が、そうした意味で、近代文学への理解と関心を呼び起こす一つの契機になれば、と願っている。

近代日本文学の歩みは、容易ではなく、羅針盤のない船が、暴風雨の中を彷徨し、苦闘したさまに似ていた。それは、封建制社会から一挙に近代資本主義の仲間入りをし、西洋文学の荒波と、近代日本社会の急激な地殻変動の二つに挟撃された航海であった。その中で、得たものも、失ったものも多かったはずであるし、強靱に貫

いてきたものもあるはずである。その航跡を、今、明快に提出しうる段階には至っていないだろう。歴史のまだ浅い近代文学研究は、今なお、その探求途上にあると言える。この三冊も、確定的なひとつの構図、ひとつの結論に到達しているわけではない。明治・大正・昭和の区分や章だても、ほぼこれまでの研究成果に準じたものだと言ってよい。それは、この三冊が、単独執筆ではなく、共同執筆であることにもよっている。しかし、それだけに、作家・作品・文学史への多様な接近や新しい視角を見出すことができるはずである。

この三冊は、専門家や研究者でない読者にも読みやすいように、また、文学史の概観をつかみやすいように、構成上、さまざまな工夫をした。概説とは別に、主要な作家をとりあげ、文学史叙述と作家論・作品論を組み合わせることで、従来の類書の陥りがちな平板さを避け、清新な「文学史」を目ざしてもいる。また、作家論の中でも、叙述を理解しやすいように、可能な限り、主な作品のあら筋を入れるとともに、現在の段階における価値評価にも意をもちいた。

過去の作家・作品と、現代を生きる人びととの出合いや交流の生々とした姿から、我々が学びうるものは多い。作家・評論家・研究者の方に、特別に執筆していただいたのは、そのためである。我々の無理なお願いを快諾された方々に、心から感謝したい。

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.

多数の執筆者の協力によってつくられた、この三冊の本が、近代文学の研究や鑑賞への有意義な試みとして世に迎えられ、新しい近代日本文学史樹立のためのささやかな一布石ともなるならば、我々の喜びは、これに過ぎるものはない。最後に、共同執筆という煩瑣な仕事にもかかわらず、労苦を惜しまず、すぐれた論稿を寄せて下さった執筆者の方々に深く感謝の意を表したい。

昭年四七年四月

紅野敏郎
三好行雄
竹盛天雄
平岡敏夫

◆執筆者紹介（執筆順）◆

西垣勤▽昭和一〇年生。現在、神戸大学教育学部助教授。
主著・主論文『有島武郎論』（昭四六、有精堂）、『こゝろ』覚え書」（『日本文学』昭四六・九）

紅野敏郎▽大正一一年生。現在、早稲田大学教育学部教授。
主著・主論文『写真近代日本文学百年』上下〈共著〉（昭四二、明治書院）、「転換期の文学―一九二一年」（『文学』昭三九・一一）

河村政敏▽昭和三年生。現在、フェリス女学院大学文学部教授。
主論文「佐藤春夫・美しい町」（『日本近代文学』昭四〇・一一）、「木下杢太郎」（『日本近代文学』昭四二・五）

分銅惇作▽大正一三年生。現在、実践女子大学文学部教授。
主著『現代詩評釈』（昭四三、学燈社）、『近代詩鑑賞辞典』（昭四四、東京堂）

畑有三▽昭和九年生。現在、専修大学文学部教授。主著・主論文『二葉亭四迷集』〈共著〉（『日本近代文学大系』第四巻、昭四六、角川書店）、「近代文学の黎明」（『国文学』昭四六・一二）

榎本隆司▽昭和三年生。現在、早稲田大学教育学部教授。
主論文「『源義朝』論」（『軍記物語とその周辺』所収、昭四四、早稲田大学出版部）、「『遁走』論」（『学術研究』昭四五）

三好行雄▽大正一五年生。現在、東京大学文学部教授。
主著『島崎藤村論』（昭四一、至文堂）、『作品論の試み』（昭四二、至文堂）

川崎展宏▽昭和二年生。現在、明治大学法学部教授。
主著『高浜虚子』（昭四一、明治書院）

菅井幸雄▽昭和二年生。現在、明治大学文学部教授。
主著『リアリズム演劇論』（昭四一、未来社）、『演劇の伝統と現代』（昭四四、未来社）

磯貝英夫▽大正一二年生。現在、広島大学文学部教授。
主著『昭和文学作家研究』（昭三〇、柳原書店）、『資料集成日本近代文学史』（昭四三、右文書院）

本多秋五（評論家）　平野謙（評論家）
中野重治（作家）　寺田透（評論家）
尾崎秀樹（評論家）

目次

はしがき

第1章　大正文学の成立

1　白樺派の文学 ―― 西垣　勤　3

新世代の登場（3）　白樺派の意義（4）　上流特権階級の子弟たち（4）
オ坊ッチャンの苦悩（5）　自我の絶対肯定（7）　西洋絵画への傾倒（8）
『白樺』の初期（8）　白樺派の全盛期（9）　『白樺』の衛星誌群（10）

★武者小路実篤 ―― 西垣　勤　12

『お目出たき人』の清新な文体（12）　トルストイへの心酔（13）　トルストイからメーテルリンクへ（14）　人道主義への傾斜（14）　「新しき村」へ（15）　『幸福者』の比類のなさ（16）　昭和の戦争協力と戦後（16）

★志賀　直哉 ―― 西垣　勤　18

志賀文学の原点（18）　『或る朝』と『網走まで』の誕生（19）　父子の対立（20）　『大津順吉』から『時任謙作』への挫折（21）　『暗夜行路』への転移（22）　『暗夜行路』の世界（22）　『暗夜行路』の意義（23）　調和的心境小説から沈黙へ（24）

★有島武郎――西垣勤　25

青春の彷徨（25）　『或る女のグリンプス』からの文学の出発（26）　奔流のような創作活動（27）　『カインの末裔』（28）　『或る女』の完成（29）　有島文学の終焉と死（30）

2　『奇蹟』と『新思潮』――紅野敏郎　35

自然主義への対置（35）　「心」の重視（36）　「生」の梗塞感（38）　『奇蹟』の道場主義（39）　『新思潮』の成立基盤（40）　精神的血脈（41）　大正期文壇の成立（43）

★豊島与志雄――紅野敏郎　46

文学史上の光栄と孤立（46）　豊島文学の展開――知性と感覚の一致（47）

★芥川竜之介――紅野敏郎　50

鋭い美意識と完成への欲望（50）　下町の「家」と漱石、鷗外の影響（52）　第一創作集『羅生門』の反響（53）　中期から後期へ（54）　気鋭の評論と芥川の死（55）

★菊池寛――紅野敏郎 57
菊池文学の特質（57）　戯曲『父帰る』の意義（59）　テーマ小説の展開（60）
時代の寵児・文壇の大御所的存在（61）
★葛西善蔵――紅野敏郎 63
求道的芸術派（63）　生活上の劣等意識と文学上の優越意識（65）　私小説の極北（66）
★広津和郎――紅野敏郎 68
散文精神（68）　広津文学の原点（68）　大正期評論の白眉――『作者の感想』（70）　性格破産者ものと私小説（71）
★宇野浩二――紅野敏郎 76
宇野文学における「夢」と「詩」と「饒舌」（76）　「気質」と「風格」と「文学の鬼」（78）　物語作者の才能と筆力（80）
3　大正期の耽美派――河村政敏 81
『スバル』派の行方（81）　耽美派の末流（83）　三田派の市井物（85）
遊蕩文学撲滅論（86）　新しい耽美派の登場（88）
★永井荷風――河村政敏 90
「流竄の楽土」の追懐詩人（90）　近代的な写実精神（92）　花柳小説の双璧――『腕くらべ』と『おかめ笹』（93）　偏奇館の西洋隠者（94）

★佐藤春夫――河村政敏　96
世紀末的な近代の憂愁（96）　抒情詩人から散文家へ（97）　閉ざされた心象風景『田園の憂鬱』（98）　多種多様な個性の開花（100）　文学教科書『退屈読本』（101）
★谷崎潤一郎――河村政敏　102
大正期前半の健康な悪魔主義（102）　非「異端者の悲しみ」（104）　大正期後半の芸術と生活の乖離（105）　戯曲時代（106）　あくなき女体の追求『痴人の愛』（106）
4　大正期教養主義――紅野敏郎　108
教養派なるものの性格（108）　哲学青年・思想青年・文学青年のオーバーラップ（109）　漱石門下生と『白樺』の人びと（112）
5　労働文学――分銅惇作　115
社会主義運動の「冬の時代」（115）　『近代思想』の役割（116）　労働文学の発生と民衆芸術論（117）　『黒煙』と『労働文学』（118）

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com

第2章　明治作家の結実

1　鷗外と漱石――畑有三　123

新時代への姿勢（123）　鷗外の変容（125）　漱石の成熟（126）　大正作家への影響（127）

★森鷗外――畑有三　129

晩年の姿勢（129）　「意地」のドラマ――『阿部一族』（130）　「歴史離れ」の行程――『安井夫人』（132）　史料のなかの邂逅――『澀江抽斎』（133）

★夏目漱石――畑有三　135

自己本位と覚悟（135）　明治の生の確認――『心』（136）　現代人の意味――『道草』から『明暗』へ（138）

2　自然主義作家――榎本隆司　140

危機の状況――「四十の峠」（140）　芸術と実行（142）　客観主義文学の成熟（144）　私小説・心境小説への傾斜（145）

★島崎藤村――榎本隆司　148

血の宿業（148）　告白と復活――『新生』（149）　解放と定着――『嵐』の

あと（151）　『夜明け前』への道（152）

★田山花袋――榎本隆司　153

時は過ぎ行く（153）　自然主義的人間観（154）　感傷への回帰（155）　敗滅のリズム――歴史小説への道（155）　花袋文学の到達点（156）

★徳田秋声――榎本隆司　158

すぐれたリアリスト（158）　時代の女――『あらくれ』（159）　新しさの限界（160）　私小説への傾き（160）　主観の窓開く――心境小説へ（161）　ゆがむ「自然主義的偏見」（162）

★岩野泡鳴――榎本隆司　164

悲痛の哲理（164）　徹底した自我充足――『毒薬を飲む女』（165）　利那主義の実行哲理家（166）　一元描写論と五部作の改編（166）　渦中の人――『日本主義』前後（167）　独存強者――『征服被征服』（168）

★正宗白鳥――榎本隆司　169

壮年正宗白鳥（169）　客観主義への徹底――『牛部屋の臭ひ』（170）　懐疑と倦怠（171）　凄絶な人間凝視――『生まざりしならば』（172）　大正文壇の遺産（173）

★近松秋江――榎本隆司　174

無情緒主義への反発（174）　褒貶の中に立つ（175）　限りなき痴愚――「人生の奇蹟」（176）　恋から愛へ――『子の愛の為めに』（177）　その文学的基盤（177）

第3章　詩歌と戯曲

1　大正期の詩歌――三好行雄　181

大正初年代の詩壇地図（181）　口語自由詩の成立（183）　『感情』の詩人（184）
大正詩壇の諸個性（186）　現代詩への架橋（188）　大正期の歌壇（189）
近代俳句の展開（191）

★高村光太郎――三好行雄　193

東と西（193）　『道程』の世界（194）　『道程』の方法（195）　『典型』について（196）

★萩原朔太郎――三好行雄　198

『月に吠える』の世界（198）　朔太郎の方法（199）　『青猫』（201）　『氷島』の詩語（202）

★室生犀星――三好行雄　204

『抒情小曲集』（204）　抒情の二重構造（206）　小説家犀星（206）

★宮沢賢治――三好行雄　208

『雨ニモマケズ』（208）　文語詩の意味（209）　『春と修羅』第一集（210）

無声慟哭（210）

★斎藤　茂吉――川崎展宏　212

茂吉の写生（212）　現世的な茂吉（213）　茂吉と歌（214）　『赤光』（215）
『あらたま』以後（216）

★高浜　虚子――川崎展宏　221

「形式を先にして生まるゝ文学」（221）　虚子と能楽（222）　伝統墨守と新人の発掘（223）　客観写生（224）　花鳥諷詠（224）　一貫した態度（225）

2　大正期の戯曲――菅井幸雄　226

時代区分の特徴（226）　歌舞伎と新劇との接点（226）　二元の道――演劇の大衆性と芸術性（228）　新劇の転換期（230）　近代への架橋（231）　築地小劇場の運動（234）

第4章　大正から昭和へ

1　初期プロレタリア文学――分銅惇作　239

『種蒔く人』の出発（239）　『種蒔く人』の運動と意義（240）　『文芸戦線』による再出発（241）　青野の『目的意識論』の波紋（242）　山川イズムと福

本イズムの対立（243）　対立と分裂の時代（244）　主要な作家と作品（245）
★葉山嘉樹――分銅惇作　247
『海に生くる人々』の意義（247）　葉山の労働運動と文学的出発（248）　葉山文学の特質（249）　後期の文学活動（250）
2　新感覚派の登場――磯貝英夫　255
関東大震災（255）　『文芸時代』の創刊（256）　新感覚派の理論（257）　新感覚派の作品（258）　その本質（259）
3　大衆文学の成立――磯貝英夫　261
広義の大衆文学と狭義の大衆文学（261）　中里介山と白井喬二（262）　マス・メディアの発達（264）　新進作家たち（265）　通俗現代小説（266）　探偵小説その他（267）

近代作家とわたし

◆有島武郎研究の思い出――本多秋五　32
◆広津和郎との出会い――平野謙　73
◆茂吉とわたし――中野重治　218

◆葉山嘉樹とわたし――寺田　透　252
◆中里介山とわたし――尾崎秀樹　268

関連記事

ロダンの手紙と写真（17）　里見弴と泉鏡花（24）　『赤い鳥』のモットー（31）　谷崎精二の印象（67）　久保田万太郎の世界（95）　抱月追悼（157）　生活改良主義者――上司小剣（163）　片上伸、相馬御風の転進（173）　朔太郎のアフォリズム（203）　『アララギ』の前半期（217）　プロレタリア文学と文壇（251）

▼参考文献――271
▼年　表――278
▼事項索引
▼主要人名・作品索引

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.